

# 母子保健推進員が行う訪問活動への行政保健師の関わり

當山裕子<sup>1)</sup>、外間知香子<sup>1)</sup>、小笹美子<sup>2)</sup>、宇座美代子<sup>1)</sup>



1)琉球大学、2)島根大学

## 要旨

行政保健師6名を対象に、母子保健推進員との関わりについてインタビューした。訪問活動に焦点を当て質的帰納的に分析した結果、5つのカテゴリー【】が抽出された。保健師は母推と連携して訪問活動を行う際に、【母推に子育て支援の役割を付与する】ことを基盤とし、【子育て支援が必要な親子を把握する】ことや、保健師と【母推が担える役割を確認する】こと、【母推が訪問支援しやすい工夫をする】などの関わりを持っていた。さらに、保健師は関わりの中で【母推の活動への貢献感を保つ】ことを意識していることが明らかとなった。

## I. 背景及び目的

地域の住民組織やその構成員とのパートナーシップは、ヘルスプロモーションを推進する際に欠かせない<sup>1)</sup>。行政保健師(以下、保健師)は家庭訪問による保健事業への勧奨や親子の健康状態の把握を母子保健推進員(以下、母推)と連携して行っている<sup>2)</sup>。

本研究では、母推が訪問活動を行う際に保健師が行った関わりの内容について明らかにすることを目的とした。

## II. 方法

- 1)対象:母推担当を経験した行政保健師6名
- 2)調査期間:平成22年7月～平成23年10月
- 3)調査内容:基本属性、母推との関わりを経験、経験に伴う価値観、考え方、心がけていることなど
- 4)データ収集方法・分析方法:半構造化面接を行い、面接内容を対象者の了解を得た上で録音した。これを逐語録に起こしデータとし、質的帰納的に分析した。

## III. 倫理的配慮

対象者に研究目的・計画、回答への自由参加・匿名性の保障、研究結果を公表することを口頭・文書にて説明し、調査の了解を得た。本研究は研究者の所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結果

### 【母推の貢献感を保つ】

#### <関わった親子の経過や変化を母推へ伝える>

「母推さんが呼びかけたあの子が健診に来てたよ。」とか「学校で歯磨きする子が増えたよ。」とか、「健診受診率が上がったよ。」という母推の活動の効果と思えるものもしっかり返してあげるように意識しました。

母推さんから「あそこの家、ちょっと気になるんだけど。」と言って来て、訪問したらその家のことは母推に「あんなだったよ、行って来てよかったよ。」と返すことが大事。

#### <母推の活動への想いを共有する>

母推が「自分が子育てして、やり直しはできないけど、今子育て中のお母さんに楽しくやってほしいから手伝いたい。」って。母性ですかね。本能？それがわが子だけに向かない。広く地域の子どもをみんなで育てている想いじゃないですかね。

### 【母推が訪問支援しやすい工夫をする】

#### <地域の子育てに役立つ情報を提供する>

母推が活動する時、お母さんたちから質問があったときに、ある程度提示できるように予防接種や保健事業の日程表とか渡している。

#### <地域の母子保健に関する課題を共有する>

自分の地区の課題は何か？行政としてどこを目指しているのか？という地区の実態を定例会で数値データで示し、お互いに確認しました。

#### <母推からの相談にタイムリーに対応する>

定例会では母推から困ったケースでこういう事例があったよ、とみんなで共有して、こんなときどうしたほうが良かったかな、こういう話は結構あがってくるんです。

個別の母推が困ったケースというのは「こんにちは赤ちゃん」で行った後、ダイレクトに電話だったり、直接保健師を母推が訪ねて来て「こういうケースがありましたよ。」っていう事があります。その時は、受ける保健師としては、私の地区じゃないからとか、母子担当じゃないからという事はない。来たら保健師の誰かが対応する。自然にそうなっています。

### 【母推が担える役割を確認する】

#### <母推の個人特性を把握する>

母推の中には保健師と一緒に健康教育が得意な人もいれば、地域の人たちの状況を把握していて、名簿とか見なくてもさっさとその家に行ける人がいる。

#### <母推に頼める範囲を見出す>

母推が訪問した時に、お母さんたちには「何かあったらこの電話番号(保健センター)にかけてね。」ということをお母さんから伝えてもらう。「それを伝えるだけでもいいのよ。」という事を保健師から母推に話している。お母さんが連絡できそうにないと母推が判断した場合は、「保健師から連絡いれさせましょうか。」ということで母推からお母さんに伝えてもらう事もある。「じゃあ保健師から連絡させるね。」って、母推が保健師につないだりしている。

#### <支援が必要な親子の情報を母推へ伝える>

その親子への支援を依頼する時、私(保健師)は母推が親子への先入観を持たないようにと考え、情報を最小限にして話した。

### 【子育て支援が必要な親子を把握する】

#### <保健活動を通して支援が必要な親子を把握する>

震災の後、地区に身寄りのないお母さんが子どもを二人つれて、自主避難してきた。前の居住地の保健師から支援依頼を受けて、健康診査が未受診の乳児と上の子は発達障害という情報があった。状況からお母さん一人では健診の受診は無理だなと考えて、お母さんに母推を紹介した。

#### <母推からの報告で気になる親子に気づく>

母推からは「赤ちゃんがいるお家だけど、上の子、なんか学校に行っていないみたいよ。」というような不登校の情報が入ってきたりする。

支援依頼表に発達障がいとか多動傾向とか書いてあったから、保健師も構えていたんだけど、母推から「あの子、こんな風に落ち着いていられたよ。」って話を聞いて、親子に対する見方が変わった。

### 【母推に子育て支援の役割を付与する】

#### <自治体の長名で委嘱や依頼を行う>

母推さんは市町からの委嘱なので、市のマーク入りの名札を付けて、身分を分かりやすくしている。

定例会で、専門家を招いて保健師も母推も個人情報保護の勉強会をしました。

#### <母推の役割を明文化する>

新体制になってから「みんなやる気があるけど、何をしたらいいかわからない」って状況。(略)基本から法律を勉強しながら、私も母推もみんな基本から固めていったっていう時期。定例会の時に上司に入ってもらい、「会則はこういうためにあるんだよ、要項はこうなっているんだよ」と説明してもらった。「自分たちは何に基づいて活動しているか。」をみんなで抑えることが出来た。

## V. 考察

中山ら<sup>3)</sup>はコミュニティエンパワメントの望ましい状態として「パートナーシップの形成」をあげ、住民が行政や専門家をパートナーと認識し、対話を行い、目的や情報を共有し、共に活動することと述べている。今回の結果からも保健師は、支援が必要な親子に母推を引き合わせる役割は保健師にあるが、その際に母推が担える役割をお互いに確認し、母推が訪問支援に関わりやすい工夫を行っていることが明らかとなった。また母推がやりがいをもって活動するには、支援の受給者となる親子と、保健師のパートナーとして支援提供者となる母推の双方の個人情報を守り、関わる親子の状況やその後の経過を母推へ精査しながら情報提供することも必要であると考えられる。

## VII. 引用文献

- 1)ローレンスW.G、マーシャルW.K:実践ヘルスプロモーションPRECEDE-PROCEEDモデルによる企画と評価、神馬征峰訳、医学書院、30-82、2005
- 2)社団法人母子保健推進会議:母子保健推進員等の資質向上と組織育成マニュアル、1-96、2009
- 3)中山貴美子、岡本玲子、塩見美沙:コミュニティエンパワメントの構成概念-保健専門職による評価のための「望ましい状態」の項目収集-、日本地域看護学会誌、8(2)、36-42、2006